

訪問日：2017.8.28 / エリア：京都

NPO法人 京都子どもセンター



回答者 竹内 香織さん (NPO法人京都子どもセンター理事長)

活動の経緯

全国で1967年頃からおやこ劇場を地域で作る流れがありました。京都の演劇人や学生らがその流れを取り入れて活動を始め、現在まで子どもを中心に、学区単位ではできない文化活動をしようということが続いています。

専業主婦や学生が担い手のボランティア活動として継続していましたが、会員の子もだけでなく、地域全体の子どもの取組に変えていこうとしていた時期に、NPO法が整備されたことを受けて、2000年にNPO法人格を取得し、京都子どもセンターとして再スタートしました。

ネットワークづくりの方法

中間支援ができる組織になりたいと思って活動しています。地域自治組織とNPOをマッチングし、ノウハウを持っているスタッフが活動の伴走をします。「こども city ミニ京都」といって、子どもが街や仕事をつくるプロジェクトでは、京都の東山、北区で似た取組をしているということで、サポートをしてほしいという声の掛かり、今年は東山区に関わっています。

伏見区の田中宮では、地域の盆踊りづくりを龍谷大のサークルと一緒に行いました。そのときに、あそびブースを作る手伝いで、安いものを仕入れて売るだけでなく、新聞紙を使ったあそびや割り箸でつぼうなど、みすばらしくても、家庭で再現してみようと思える遊びを提供したいと地域の人に説明して、実施することができました。「(子どもは)キラキラの腕輪が買えるほうが好きなんじゃないか」と聞かれましたが、実際には、割り箸でつぼうで遊ぶだけでなく、「つぼうの作り方から教えて」「お店番をやらせて」と言ってくる子どもたちがいました。お母さんからも、久しぶりにゆっくり子どもと遊べたという声をもらうことができました。子どもが主体的に関わるきっかけを増やすことで、どこ

の地域でも変わらない、遊ぶ楽しさを発見できるお祭りになったと思います。

地域と子どもとの関係

ネットワークづくりをしていると言っても、ただ単に地域の自治組織やNPOと京都市内の子どもをマッチングするものではありません。例えば、福知山の農家体験プログラムでは、福知山の農家のおじさんたちがプログラムを作ってくれます。田植えをする前に草を刈らないと田んぼに入れないから草をまず刈る。そういう準備があって初めてお米が育ち、収穫ができることを分かってこそ、お米の大切さが分かるといいます。子ども自身が鎌の持ち方を習って草を刈るとか、「本当はこんな準備が必要だけど今日は先にやっているよ」といった説明を入れてもらうプログラムづくりを心掛けています。

どんな子どもにとっても、地域が受け皿になることが必要だと思っています。KYOTO ホットとアートプレゼントプロジェクトでは、病院や病児にパフォーマンスを届けるということをしています。それは生きづらさのある人に何かプレゼントしようという活動ではないんです。それだったら、助成金を獲得してプロジェクトをしていればいいですね。そうではなく、地域の人たちに病院の子どもたちのことを知ってほしいから、寄付を募って運営をしています。多くの人の寄付でパフォーマンスが実現することで、病院の子どもや親御さんが「一人じゃない」と実感してもらえるかもしれません。そういう枠組みを話して、寄付を募っています。伝えることで、活動を理解していただく過程も大事にしたいと考えています。

子どもの権利条約の精神に基づき、子どもが社会体験や社会参画の機会を広げ、伸びやかで豊かな子ども時代を過ごすための環境を増やす活動を行う。「子どもが真ん中」、「子どもの「今を」受けとめる」、「サポートのしくみをつくる」を三本柱に、学区を超えたプログラムを実施している。

〒600-8191
京都市下京区五条高倉角堺町21
ウエダビル206
TEL/FAX: 075-201-3490

活動の課題

取り組んでいるのは子ども自身が主体となれる活動です。「子どもの権利条約」ができて20年以上経ちますが、権利の保障は全国を見ても十分になされていないと思います。子どもが主体になれる、そういう価値観を大人が整えていきたいと思います。

子どもが主体になるということは、単に子どもに何かを決めさせるということではありません。例えば無人島キャンプを始めた時には、公募で集まったお互いを知らない子どもたちと、地域でキャンプ活動ができるスタッフが集まってもらい、参加者の子どもと保護者にちゃんと説明をして、参加の同意を一人ずつ取るが必要でした。

そのときに、刃物は危ないから子どもに管理させないでほしいと言った親御さんがいました。どう思うか、親全員に意見を言ってもらいました。その通りだという人もいたし、キャンプだから怪我するのは当然くらい気持ちでないと、という人など色々な意見が出ました。キャンプのリーダーだった20代の子に最終的にどうするかと聞いたら、大人みんなが自分たちのために心配して議論しているところを子どもがこれほど見ていたのだから、危ない使い方はしないはずだ、だから子どもたちが刃物を管理して大丈夫だと思うと言っていました。子どもが、自ら刃物を管理する主体になるのだと理解した瞬間を作ることが大切だと学ぶことができました。

文化活動での子どもの関わり

無人島キャンプと並ぶ看板事業として「おやこ狂言会」があります。「鑑賞も主体的な体験」と捉え、おやこ劇場の時代から引き継いで毎年1月に開催し、今年度は30周年を迎えます。

多くの子どもに伝統文化に親しんでもらうのはもちろん、ワークショップやバックステージツアー、大学生のイベントサポーター

など鑑賞以外の参加の機会をつくってきましたが、今回は30周年を機に、「子どもの参画を深化させよう」と、公募による「子ども実行委員会」を組織しました。主催者挨拶や影アナウンス、会場内誘導などイベント当日の運営、当日パンフレットの作成や協賛広告の依頼にも活躍してもらい、子どもによる「おやこ狂言会」にシフトしていく試みです。

子どもによる文化芸術の活動で、新しいチャンネルを創りだすことができると、今後の展開を楽しみにしているところです。

行政への提案

子どもと関わるためにNPOが学校に入っていくのは、とても難しいです。教育委員会が許可しないと入れません。（「協働」とよく言われますが）つながりたい組織や現場があっても、誰にどう言ったらつながれるのかNPO側からは、分からないことも多いです。

団体や活動の見える化をしてほしいと思います。成果は上げているのに、知られないまま力尽きて、なくなっていく活動もあります。京都市市民活動総合センターや、いきいき市民活動センター、府庁NPOパートナーシップセンターなどが地域とつながり、見える化を進めてくれています。知っている人同士のネットワークでしか情報が入ってこないのは問題ですし、一つの団体ができることは限られているので、色々な団体が色々な場面で声を掛けてもらえるチャンスを作ってほしいと思います。